

介護福祉士養成教育の環境づくり

東北文教大学短期大学部 准教授 横尾 成美

超高齢社会に突入して6年ほど経過したが、これから先、団塊世代が75歳以上に到達する2025年には、一人の高齢者を1.8人で支える社会構造になると想定されている。この状況に対応するためのサービス提供体制として「地域包括ケアシステム」の構築が課題となっている。近年、高齢者が介護を必要とする状態になっても、できる限り住み慣れた地域で生活を継続できるようにする観点から、小規模多機能型の介護サービスが増えている。

しかし、一方で介護人材の確保と質の高いサービスの提供という課題が挙げられている。三世帯同居率全国1位を占める山形県であるが、核家族化は急速に進行している。こうした時代の変化に伴う生活環境における影響は、学生の様子からもうかがうことができる。

2009年に改定された介護福祉士養成カリキュラムで科目の再編成が行われたが、その運用は各養成施設の裁量に委ねられている。介護現場で必要とされる多様な実践力を習得させるためには、介護の対象となる高齢者や生活の理解が必要不可欠である。これは、かつて家庭や地域でのかかわりを通して自然に獲得してきた部分とも言える。しかし、この当たり前に営まれてきた生活文化や高齢者について、授業を通して教える現状となっている。

このような学生が介護実習に行くと、理想と現実のギャップから思うような実習展開ができなくなることも少なくない。そこで、本学では地域に出てボランティアをしたり、高齢者世帯を訪問しコミュニケーションを行ったりする活動を授業として実施している。さらに「ぶんきょうサロン」を開催し、大学周辺の高齢者をご招待して“おもてなし”をしている。この授業を展開して今年で

5年目になる。サロン開始当初は、地域の方々の理解を得ることや学生を全員高齢者宅へ送り出すことへの不安があったが、それは学生達の実践力によって一気に吹き飛んだ。授業では見せない積極的な声掛け、健康状態を把握するための会話やバイタルチェック、全体を見渡して参加者が1人にならないように、すぐそばに行って話しかけお茶を提供する姿……それは、もう介護現場で働く介護職員を思わせる様子だった。まとめのレポートではすべて、高齢者への理解ができたという記述や、介護福祉士の役割は施設の中で働くことだけではなく、個別性に応じた生活支援の工夫をしたり、地域社会に目を向け困っている方がいたら支援を行うことも専門職の役割であることが認識できていた。

京都女子大学大学院教授井上千津子教授は介護福祉の専門性教育のあり方について、人権教育、感性教育、技術教育の3つをあげている。その中で感性教育について「相手の心身の状態の受容から始まり、その存在を自分と同一線上に位置づけることができるか、ここに共感の意味があり感性教育のゴールが見えるのではないかと述べている。介護福祉士の養成教育に根拠のある科学的な介護が必要になっている一方で、全人的な共感・洞察などにおける心を通わせることができる教育環境が重要であるといえる。

横尾 成美 (よこお・なるみ)

放送大学教養学部全科履修生生活と福祉コース卒業。
放送大学修士全科生生活健康科学プログラム入学。
介護福祉士養成課程を修了後介護施設で働き、平成13年から介護福祉士養成教育に携わっている。研究テーマは介護福祉教育におけるアセスメント力向上を目指した教育の方法。